

## 第6室「染織—大幡・染物の技法—」

### N-316:綾幡残欠（あやばんざんけつ）

幡は荘厳具の一つで、お堂の内外に懸けた旗のことです。この幡は、頭の部分にあたる幡頭が失われて、下方の幡足もごく一部を遺すのみです。二条の縁で囲まれた坪と呼ばれる部分は、非常に縦長で、縁は坪ごとに内側と外側の色を替えており、さらにその部分には金銅丸形金具を飾っています。縁と下方につけられている幡足にも、法隆寺の幡に共通する山形文や亀唐花亀甲繫文など幾何学文様の綾が多用されています。

### N-319-62:平絹大幡残欠（へいけんだいばんざんけつ）

同じく大型の幡ですが、こちらは茶色味をおびた黄地平絹のみで仕立てられています。縁は一条で、縁と坪を区切る坪堺も一条、さらに縁からは帯状の幡身手を出しています。

### N-29:鸚鵡文藤纈毬代（おうむもんろうけちたんだい）

向かい合う水鳥を納めた八稜形（はちりょうけい）と、同じく対称に表わした草花文の上方に蝶をあしらった文様を交互に表わしています。それぞれの文様は、均等に置かれていない部分もあり、1型ずつ蠟（ろう）をつけて文様を捺していったものと推測されます。

### N-319-44:襷文纈纈平絹幡足残欠（たすきもんこうけちへいけんばんそくざんけつ）

### N-319-45:襷文纈纈平絹幡足残欠（たすきもんこうけちへいけんばんそくざんけつ）

絹製幡につけられていた幡足の残欠で、大柄な襷文を纈纈で表わしています。纈纈とは絞り染めのこと。一般的には、裂を摘んで糸などで括った目結文（めゆいもん）が多いのですが、この襷文は長い裂を一方の端から斜めに巻き込み、糸や細紐などで縛って染めたと考えられ、大胆な構成が印象的です。

### N-319-91:黄緑地纈纈平絹天蓋垂飾残欠（きみどりじこうけちへいけんてんがすすいしょくざんけつ）

### N-319-93:濃緑地纈纈平絹残欠（こいみどりじこうけちへいけんざんけつ）

### N-319-94:黄地目結文纈纈平絹残欠（きじめゆいもんこうけちへいけんざんけつ）

### N-319-124:緑地目結文纈纈平絹残欠（みどりじめゆいもんこうけちへいけんざんけつ）

纈纈とは絞り染めのこと。作品をみると、巻いたときの糸が一重であったり二重に現れたり、また、摘んだ形が四角もあれば、円形になるもの、だ円のようにややつぶれている形もみられる。手で一つ一つ巻いて行くので、まったく同じ形になりません。

(裏面に続く)

**N-319-95:紫地纈纈綾残欠 (むらさきじこうけちあやざんけつ)**

纈纈は平絹に行われることが多いが、ここにみられるように綾に行われる場合もあり、珍しい作品です。

**N-319-96:淡茶地花鳥雲文摺絵平絹残欠 (うすちゃじかちょううんもんすりえへいけんざんけつ)**

墨だけで花樹と草花、向かい合う鳥文を配し、間に雲文を表わしています。他の同種の残欠から、かなり大形の文様であったことがわかります。この文様は、型紙を用いて摺染(すりぞめ)したとも、型を用いた版型によるともいわれていますが、明らかではありません。この残欠で注目される点は、右上方のゆるくカーブをえがいた部分で、形状と大形の文様から、伎楽などに使われた衣服の袍の一部と考えられます。

